

「富士の夏の思い出」

神野 直彦さん



プロフィール

神野 直彦(じんの なおひこ)
日本社会事業大学学長、
東京大学名誉教授

1946年埼玉県生まれ。
1969年東京大学経済学部卒業、日産自動車を経て1981年東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。大阪市立大学助教授、東京大学教授、東京大学大学院経済学研究科長・経済学部長、関西学院大学教授、地方財政審議会会長などを経て、現在日本社会事業大学学長・東京大学名誉教授。地方分権改革有識者会議座長、税制調査会会長代理、社会保障審議会年金部会会長、同左企業年金部会会長、同左資金運用部会会長、カーボンプライシングのあり方に関する検討会会長なども務める。
専攻は財政学。著書に『地域再生の経済学』(中央公論新社、2002年)、『財政学』(有斐閣、2002年)、『「分かち合い」の経済学』(岩波書店、2010年)、『日本の地方財政』(有斐閣、2014年) (共著)、『人間国家』への改革 参加保障型の福祉社会をつくる』(NHK出版、2015年)

屋を訪ねて、時を過ごすことにしている。

庄川に限らず、黒部川、常願寺川と急峻な山間から美しき海へと流れ落ちる川の谷間ごと営まれる富士の暮らしは、飛行機の機内から眺めると美しい。富士の人々が長い年月をかけて、育んできた温かな暮らしが空から推察できる。今では新幹線で富士を訪ねるけれども、その当時は飛行機を利用した。

夏の富士を訪れて帰路につくと、妻は誰に聞かせるでもなく「私の夏休みは、これで終わりね」と呟いたものである。それでも妻の表情は、憑き物が落ちたように優しくなっていて、私の心を癒してくれた。

きる。

私が富士を頻繁に訪れるのは、私の同級生である石井隆一知事の道案内の賜である。苦しい時に結ばれた友情は、決して壊れることがない。石井知事と私は単に同級生というだけでなく、分権改革など労苦を共にし、互いに互いの人生の責任を引き受けるようになったのである。待ち焦がれた春は楽しむ暇もないまま、忙しく富士は夏へ向かう。静寂の冬とは対照的に、立山の夏は生命の躍動する季節となる。私は石井知事に誘われて、暑き夏になると、富士の立山連峰の山ろくで開催される「とやま夏期大学」の講師を務めていた。

富士の夏は暑い。それでも立山連峰の緑の懐に抱かれると、涼しさが心を洗い清めてくれる。木々の囁きで眠りから覚めると、切り立った山の頂ぎから、霧雲が頬を伝う涙のように流れ落ちる。森の中に足を踏み入れると、自分の足音だけしか聞こえなくなる。

しかし、それは雪に抱かれた冬の静寂とはまったく違うことに、すぐ気づかされる。虫たちが踊りでて、鳥たちが競つように歌い出すからである。

生命の躍動する夏の富士を、よく私は

妻と二人で、車を借りては、温泉巡りを楽しんだ。それも「こきりこ節」のゆったりとしたリズムに合わせてである。夏の富士を旅すると、思わぬドラマが演出される。

五箇山に向かうために、八尾を通り抜けようとすると、車がまったく動かなくなってしまう。「おわら風の盆」が開催されていたからである。しかし、それはそれで、当初の目的を諦めれば、望外の楽しみを味わうことができる。「おわら風の盆」とともに、古き趣き豊かな街並みの散策ができるからである。

鈴木忠志の演劇を鑑賞しようと利賀を目指すと、大事となる。対向車に出会うと、通り抜けることが不可能な山道を走らなければならぬからである。それだからこそ、鈴木忠志の凛とした姿に出迎えられる、観劇ができた時の喜びは「一入」となる。

日本の原風景ともいえるべき散居村を巡りながら、城端、井波を旅すると、推理小説で殺人事件の舞台によく利用される所が多いことがわかる。それを訪ねるのも一興と、巡っていくと高岡に辿りつく。高岡に行くと、私は気に入っている古本

「となみ野」に生まれ育った写真家安

念余志子は、「どんなに冬が長くても、春はやがてめぐりくる。だれのもとにも」と歌っている。雪の降る富士の街を歩くと、雪が街の喧騒を飲み込んでしまったように、いくら耳を澄ましても、何の物音も聞こえない。歩いてても歩いてても、静寂の世界は深まるばかりで、生ける者は自分一人だという錯覚に陥る。

春は光とともに訪れる。クリスマスはキリストの誕生日というわけではない。クリスマスはゲルマンの冬至の祭り、つまり太陽の再生を祝う祭りを、キリスト教が取り入れたといわれている。スウェーデンのクリスマスは、12月13日のルシア祭から始まる。寒き朝にサンタ・ルシアを歌うルシア祭は、光の祭りである。ルシアは光を意味する。明るさの単位であるルクスも、ルシアつまりラテンで光を意味するルシスに由来する。

孤独を感じる寒き冬は、嫌われる季節だけれども、夜の最も長い冬至を迎えると、明るい昼が確実に長くなり、「春はやがてめぐりくる」と信じられるようになる。それだからこそ人間は、苦しい時でも夜明けを信じて乗り越えることができ

